

西表島・仲良川の生活誌

流域の地名を手がかりに

安溪遊地

地名はみんなみんなのもの

沖縄の地理学者の仲松弥秀先生から教わったことは、現場を踏んで、地名を学ぶことの大切さだった。アイヌ語地名の研究で著名な山田秀三先生からもその教えを直接受けた。「西表島の地名の中で、ピナイなんかアイヌ語そのもののようにだけれど、そこは砂利のある川ですか？ やっぱり現場に立ってみなければ本当のことはわかりません。でも、90歳になって、医者が長旅を禁止するので困っています。」とおっしゃっていた。熊本であった全国地名研究大会で挨拶をされた山田先生は、「地名はみんなみんなのものですから、みんなで研究してみんなで大切にしていましょー！」と言われた。西表島では、あやしげな観光用地名や、方言の難しさからまちがって書かれた地名が非常に多いことを残念に思っていた私は(安溪、1994)、正しい伝承をできるだけわかりやすく還元していくことの大切さを教えられたのだった。

今回は、西表島西部の仲良川に焦点をあてて、西表島の地名のもつ魅力の一端を述べてみたい。これは、これまでに発表した浦内川誌(安溪・安溪、2003など)の続編をなすものであり、現在作成中の1300項目からなる西表島地名データベースの公開に向けた準備でもある。

なからがわ(仲良川)は、西表島西部方言ではナーラ・ミナトゥ(下流部)、ナーラ・カーラ(上流部)という。長さは8.75km、流域面積は23.25km²で、河口から5.50kmまでは二級河川の指定を受けている。8km上流まで舟で航行ができ、1995年の河口付近のマングローブ帯は約44.3haである(国際マングローブ生態系協会、2004: 153)。地名の由来ははっきりしない

が、西表島西部方言では、「ナー」は「長い」という意味であり、「ラ」は、川の地名に多い語尾である。

仲良田節のふるさと

西表島の西部で歌われる古い歌がある。「仲良田節」である。仲良田は仲良川流域一帯の肥沃な水田の名に由来している。この仲良田節は神歌とされ、日頃は決して歌ってはならないと戒められている。植え付けた苗が、神仏に守られ、豊かな自然の恵みによってすくすく成長し、初穂(シコマ)を迎えた日から歌い始めることが許される。そして、豊年祭(プリヨイ)の月である7月(旧6月)に限って歌ってよいとされてきた。西表島の島びとたちは今も戒めを守り、毎年、心を込めて歌える日を待ちかねている。祖納・干立の両村ではサンシンによる伴奏をとまって歌うこともあるが、網取村では、仲良田節はより古風な「カラウタ」すなわち伴奏なしと決まっていた(安溪・安溪、1986:191-194)。

ナカラダ 仲良田節(祖納村)

一、ナカラダヌ マイン パナリチジ アーン

仲良田の米も 離島の頂きの粟も

二、チジ シラビミリバ ミルク ユガフ

粒を調べてみれば 豊年満作である(後略)

この半世紀ほどの間に西表島に起こった人と自然の関わりの変化の大きさは、目をみはるものがある。今では、仲良川沿いの水田はすべて放棄され、内離島、外離島の焼畑の煙も消えた(安溪、1998)。しかし、それでもなお、古い神歌をうたい継ぎ、自然の恵みに感謝しつつ、敬虔な祈りを忘れなかった西表島の島びとたちの精神は今も脈々と息づいている。そのことを、仲良川流域の地名を中心とする生活誌として描いてみたい。

川の大切さ

山が多い西表島の住民にとって、川が道であり、割り舟が足であった。だから、山に建材を切りに行ったりイノシシ猟に行ったりするときも、川沿い

の田に出かけそのついでにオオウナギ(方言でオーニ)を釣るときも、船着き場から舟を出すのである(写真1)。山の幸、川の幸をいただく時に、舟を利用するこの習慣は、自動車道路が整備され、川沿いの水田のほとんどが放棄された今日でも、滅びてはいない。



写真1 山の幸に感謝の笑顔(1988年10月撮影、クイラ川上流)

西表島西部方言では、川はマングローブが成立する感潮域をミナトゥと呼び、干満の影響が及ばない渓流域は、カーラと呼んで厳密に区別している。藩政期に作られた八重山の川の一覧表である竹原孫恭家文書『八重山嶋由来記』(玻名城、1983)でも「～湊」と「～川原」という使い分けが徹底しており、それぞれミナトゥとカーラに対応している。この区分は、満潮なら舟で入れる川と、舟を降りて歩くしかない川という生活上の区分そのものである。そして、舟を降りる場所をエーラという(注)。

仲良川沿いの水田地帯巡り

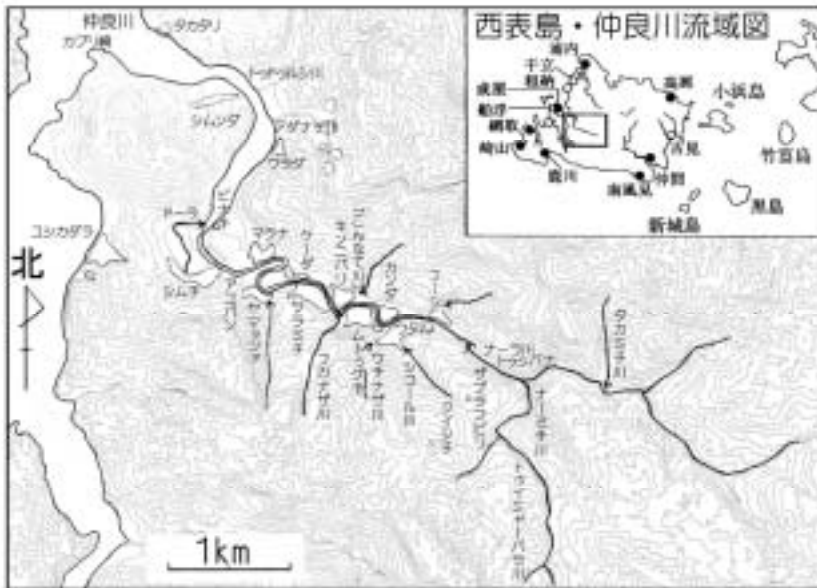
網取村(1971年廃村)の山田雪子さんは、仲良川沿いの田を耕した経験を語ってくださった。大変に深い田で、普通に立つと脇の下まで入る泥田だった。田植えの時には後ろに下がりながら植えるのだが、両足の間から土を前に送りながら植えないとうまく植えることができなかった。中には、水がわくひとときわ深いところ(ミドウキ)があって、そういう所には足場の木(ビダ)が埋めてあるものだが、踏み外してミドウキにはまれば抜けられなくなって大変だった。それほどの苦勞をしてまで仲良田を耕作したのは、干ばつに遭わないことと、豊かな実りが約束されていたからだった。

仲良川の河口から上流部にかけて分布していた水田地帯の名前は、現在ほとんど忘れられているので、聞き取れた限りを記しておく。これは、仲良川周辺の地形図に、空中写真をもちいた聞き取りに基づく方言地名を書き込んだものである(図)。道案内の話者は、水田地帯までは、祖納集落の星勲・宮良全作氏、その奥の山については松山忠夫氏である。

祖納(スネ)村の浜から舟を出して、南に進むと現在白浜と呼ばれている集落にさしかかる。ここは、炭坑時代にできた集落であり、それ以前はパマザシ(浜崎)と呼ばれて、祖納村のナッス(苗代)が3カ所に分かれて点在していた。西に横たわるのがウチパナリ(内離)島である。内離島の南端と向かい合うのが、元成屋崎だが、方言ではフナリヤーと呼んでいる。18世紀、内離島に成屋村が創建された時、人々がもともと住んでいた場所である。仲良川に入ると見えなくなるが、フナリヤーの南西にはユシカダラという平坦地があり、水田があった。戦争中、ここには集落があり「よしたばる」と呼んだ。

内離島を過ぎると仲良川から吹き出す砂の中に水路があるので、干潮の時にはそこを進む。元成屋崎の突端が右手に見える。方言ではカブリ崎というが、カブリというのは蝙蝠を指す方言であり、蝙蝠が実を好むイヌビロ属の木の方言でもある。さらに進むと向かって左手に小さな田がある。タカタリという場所で、苗代もあった。

すぐに川幅が狭まる。仲良川の河口付近を覆うマングローブの始まりである。進行方向右手(川の左岸)のマングローブの奥に細長い田があり、シムンダという。「下の田」の意味であろう。鹿川村(明治44年廃村)の南に



広がる水田地帯にもシムンダという地名があり、地籍図には「下田原」と記されている。

すぐ左手のマングローブの中に支流が見えてくる。ここは、方言ではトゥドゥルシカーラという。「轟川」というのが地名の由来であろうと考えられる。「トゥドゥルキ川」は石垣島の白保にもある地名である。上流部には水田トゥドゥルシタバルがあった。戦前、炭坑全盛の時代には、仲良川の一歩目の支流であることから「一番川」と呼ばれていた。「一番川」付近には野田炭坑の事務所や私立小学校である「みどり学園」も建てられていた。

300m進むと、左手に次の川が見える。炭坑時代に「二番川」と俗称された川である。方言ではアダナデカーラと呼ぶのが正しい。後に述べるように古文書には「あたんて」と見えるから、この名前は、植物のアダン(方言ではアダヌ)と関係があるかもしれない。かなり大きな支流であり、1963年撮影の空中写真からは流域に少なくとも6カ所の水田跡が確認できる。

このあと、すぐ左手に出てくるのが、ウラダという小さな田である。浦内川中流一帯の水田地帯もウラダと呼ばれていたが、別の地名である。炭坑

時代には星岡炭坑の坑口があった。

このあたりからしばらくの間、河床に砂が溜まった浅瀬になっている。この浅瀬はピナキと呼ばれている。ピナキの語源については、干潮時には舟で通れないため一日泣いて暮らすことがあったため「日泣き」なのだと郷土史研究家の星勲さんが言っておられたが、「泣き」は西表西部方言では「ナーヒ」であるから(前大、2003: 234)、やや説得力に欠ける。1kmほど続いた浅瀬が終わるあたりの左手にある小さい田が、ピナキヌタ(ピナキの田)だ。

向かって右手のマングローブの奥がドーラの田である。「ラ」で終わるのは、西表島西部では川の名前であることが多く、ここはマングローブであるのでドーラミナトゥナとも呼ばれている。ミナトゥとはマングローブのある川を指す方言であり、ナというのは、広がりをもった地域を指す語尾である。

次いで右手奥に広がるのが、シムチの田である。ここで穫れる米はドーラから搬出していた。

続いて左手にマラナの田が広がる。アダヌ(アダン)が多い場所だった。山手には大きな苗代があって、マラナナッスと呼ばれた。このあと、仲良川はヘアピンのように大きく蛇行する。蛇行が終わった突き当たりに当たるところが、ヤマツツアの田である。この地名は、ヤマ+アツツアと分析できる。アツツア=畦などの高まったものの側面を指す言葉だから、「山の縁」の意味であろう。同じ地名が、クイラ川右岸の支流ピドゥリ川沿いにもあり、南に山を背負い、北にマングローブが広がる細長い田という共通の立地である。

ここから上流は、川の両岸に水田が広がる。

左手がケーダ。「ダ」で終わる、水田地名であり、川の側は全部田んぼだった。右手は、サラミチの田。サラミチの水田の上流に流れ込む長い支流はフカナザカーラ(外ナザ川)と呼ばれ、すぐ上流にあるウチナザ川と対になっている。

続いて左手がキンニバリの田。「木の根」という意味だが、いわくありげな地名である。

右手に現れるのがムトゥグチの田。この上流に流れ込む川をウチナザカーラ(内ナザ川)と呼ぶ。この川の名前は、すぐ下流のフカナザ川と対に

なっていて、山手が内(ウチ)、海手が外(フカ)であることは、内離、外離の両島の名付け方と同じである。

続く左手がカンダである。上の田、あるいは神の田という意味かもしれない。カンダマイという在来稲の一品種がここで見いだされたという説を聞いたことがあるが、そうではなくて、神の田という普通名詞に由来する品種だという説もあった。

右手に広がるのがウタルの田だ。流れこむ川はシコール川と呼ばれている。

最後に左手に見えるのがフーシの田である。仲良川沿いでもっとも上流に位置する水田である。これらの水田地帯の総称が、ナカラダ(仲良田)であり、仲良田節のふるさととなっているのである。

豊かな水田の代名詞であった仲良田も、昭和の始めに蓬莱米と呼ばれる稲の新品種と化学肥料が導入されてからは(安溪、1979)、他の水田に対する優位性を失って、通うのに遠く深くて耕作に不便という理由で次第に放棄されるようになった。1963年にアメリカ軍が撮影した空中写真には、水田とその跡地がはっきり写っている。1977年、1994年の国土地理院撮影の写真と比較してみると、水田跡が樹木やアダンなどに覆われていく様子がはっきりわかる。現在の利用は、イノシシ獲りの猟師が通る他は、むかし水田の縁に植えた竹垣の筍を折り取りにゆく程度である。

古文書に見える川名との対応

八重山の川の名前を藩政期に集成した資料がある。先に触れた竹原孫恭家文書『八重山嶋由来記』(玻名城、1983)である。この文書では、川ごとに河口の向きと長さが記されているので、地形図や空中写真を用いた川の比定が可能である。

名嘉良湊に流れ込む「川原(カーラ)」として、同文書は、次の10の名前を順に挙げている。河口の方角を十二支をさらに半分にした24方位で示し、川の長さも町(60間、約109m)を基本に示している。北が子の方角であることを頭に入れ、地形図をにらみながら、上に述べた方言地名との対応を見ると、8つまではよく対応し、仲良川河口から本流が溪流部に移行するまでの間の水田地帯に注ぐ川を順に列挙したものだと思われる。

「とうき川原」申方18町程。方言地名との対応関係は不詳。

「多嘉田川原」未方18町程。タカタリ。

「とゝるき川原」午未の間18町程。トゥドゥルシカーラ。

「あたんなて川原」西方2里程。アダナデカーラ。

「こななて川原」午未の間3町10間程。方言地名との対応関係は不詳。

「下地川原」丑方8町程。シムチ。

「山座川原」亥方9町程。ヤマツツァ。

「佐良水川原」丑寅の間18町程。サラミチ。

「底原川原」戌亥の間8町程。シコールカーラ。

「名嘉良川原」戌方3里程。ナーラカーラ。

方言地名との対応が不明確な川として「とうき川原」と、「こななて川原」が残った。対応がついた8つの川の記述が、河口から上流に向けてきちんと順番に並んでいるので、「とうき川原」は、申(およそ西南西)に流れる、河口右岸の支流であろう。白浜集落の南側の溪流である可能性が強いが、方言地名の収集ができていない。続く「こななて川原」は、ほぼ南向きの短い川である。登場順からアダナデ川とシムチの田の間を探すが、その方向に流れる川は見あたらない。そもそも仲良川本流とアダナデ川がほぼ並行しているため、分水嶺までは500m程度しかなく、空中写真でみると、深い谷はひとつしかない。それはキンニバリの田の所で本流に合流する沢である。疑問も残るが、とりあえず「こななて川」の候補地として示しておく。

このようにして、西表島のすべての川名について、現在の地形および方言地名との対応関係を構築することができるのはずなのだが、地名の多くがすでに忘れられているため、順調にすべての対応関係を明らかにできるとは限らないのが残念である。

イユファイダー(魚を食べる田)という地名

また、仲良川に伝わる伝説として、鳥と人間の交流を物語るものがある。康熙27(1688)年、辰の年、名嘉良に田植えに行った男(ナヘという名だっ

た)が、浜崎(現在の白浜)の所まで来たところ、「たんちやこ」という鳥が魚をつかんだが、逆に海中に引き込まれて、半死半生になっていた。ナへは、鳥を救い岩の上で火を焚いて暖めてやり、鳥の掴んだ魚を裂いて喰わせ、「これからはこんな危ないことをするなよ。この恩を忘れるな」と言い聞かせて放してやった。それからナへが名嘉良の田に行き来する時に、この鳥が魚を掴んで落としてくれた。このことが孫の代までも続いた(玻名城、1980)。

この男の耕作していた田は方言で「イユファイダー」つまり、「魚を喰う田」と言われるようになった(星、1980: 43)。しかし、仲良田のどこにあたるのかはわからなくなっている。この鳥は今日の方言ではダンチコといい、和名はミサゴである(石垣金星さんの教示)。

さらに山奥へ

松山忠夫さんは、生前、西表の山は自分の庭のようなものだ、とおっしゃっていた。ここではごく足早の道案内をしていただく。

仲良川の奥に行くときは、フーシの田の奥のナーラエーラで舟を降りる。本川を上っていくと川は左右に分かれる。ここがトゥシパナ「砥石端」だ。この先は山道になるので、川にある堅い石で山刀や斧を研ぐからこの名前が付いている。右手に入っていくと、ナーミチカーラ(川)の尻、ナーミチヌチビを通り、ナーミチの滝を経て遡る。右手に名前のない支流がある。ここを越えると川の名前がトゥイミャーパラカーラに変わる。別名をアミクイカーラともいう。これを上がった絶頂がピドゥリダキになる。この西にある広い台地はクイラウブデーという。クイラ川の大きな台という意味だ。さて、トゥシパナに戻って左手のナーラ川の本流を行くと、道は川の音が聞こえるぐらいの所を通っている。この道はナカユクイヌミチナ(中憩いの道)と呼んでいる。左手に降りてくる川がフネーラカーラ。その次の左手の支流はタカミチカーラだ。さらに上流の本流がくるっと廻るところにグザイリャーという洞窟があり、水量が少ない時には3、4人が泊まれる。グザダキ(ゴザ岳)に登るときは、分水嶺を歩いて行く。この道をタキタッスー・ミチナ(道)という。西部の仲良川と東部の仲間川の源流にあたる所をタキタッスーという。タキとは険しい山地、タッスーは湿原の意味で、カエルやバツタの類が多い

のでそれを餌にカンムリワシが子育てする場所だ。

明治26(1893)年に、西表島の横断のために、島の東部の仲間川を遡り、グザダキを通過して仲良川に降りてきた人物がいた。弘前藩士の笹森儀助であった。写真2は、笹森儀助と同じ扮装で同じルートを横断した民俗研究家の石垣博孝氏が山中の木に登って方角を見定めている姿である。



写真2 西表島の山中横断(1984年11月石垣金星氏撮影)

木材供給基地としての仲良川上流部

西表島西部の豪族であった、慶来慶田城家の来歴を記した『慶来慶田城由来記』(石垣市史編集室、1991)には、二代目の野底当、西表首里大屋子の時代の記録として次のものがある。

- 一、宮古島の豊見親という者は、八重山がまだ首里の支配下にならない時分に、宮古島の豊見親が八重山をすべて支配し、何かと従わせていた時、年々、きや木・おもと竹・いく木・桑木を家の材木として所望した。それらを取

り揃えて積んでいって納めていたが、今度はまた、蔵の材木として、よし木を六、七〇本余り、長さ四、五間、太さ五、六尺回りのもの、檜木は一尺四、五寸角の木を所望してきた。やむをえず百姓らを集めて申し付け、仲良山あたりへ行き、山宿りして、御座岳の近辺から右の数を切り、木を山から引き出す人夫として、男女二、三百人余りを呼び寄せ、道筋の半分過ぎまで引き出した時、村から宮古島の豊見親が死んだとの早使いが来た。みんなこれを聞いて、大いに喜び、それらの木をそこの川原に打ち捨て、「さらばさらば」と大声で氣勢をあげ、帰り道に嵩の頂上に登り差声したので、その嵩の名を「ざしこいびり」と名付け、また、木を捨てた川原を「豊見親柱川原」と名付けた。山宿りへ帰り、一夜一日あやく(アヤグ)を歌い、神酒、焼酎で遊んだので、山宿を構えた所を「あよはか」と名付けたと伝える。

これらの木や竹は、現在の西表島西部方言では、順にキャンギ、ウムトゥダキ、イゾキ、クワーキ、ユシキ、カシキに当たると考えられ、標準和名ではイヌマキ、ゴザダケササ、モッコク、シマグワ、イスノキ、オキナワウラジロガシにあたる。イークはモッコクの石垣島や沖縄島での方言である。

1477年の西表島祖納村で5カ月を過ごした済州島民の漂流記には、西表島は「山には材木が多く、積み出して他の島々と貿易す」と記されている(鄭、2004: 81)。西表島から周辺の島々への材木の供給は、古い歴史をもつものなのである。さらに、『慶来慶田城由来記』によって、仲良川流域の材木の流通圏は、少なくとも宮古島にまで及んでいたことがわかる。

この項を祖納の星勲さんは、伝承を交えて詳しく描写している(星、1981: 61-63)。長文であるので、ご本人からの聞き取りを交えて以下にまとめておくが、地名に関連する内容はことに興味深い。

慶田城家の第二代、慶田城用庸が西表首里大屋子の頃である。宮古島の首長・仲宗根豊見親から西表島に対して宮殿造営のための出材の命令が下りたのであった。

15才以上、老若男女が総掛りで仰せに従った。ヤマオイダリ(出材の公役)は仲良川中流の後岸のグイヤドゥバン(御用宿谷)というところに宿泊して月20日間の役夫を勤めた。いずれも大木だけに半ヶ年(6ヶ月)を予定した、義務役で

あり精を出して掛り材伐はしたものの、この材を流し出す方法がない。そこである老人が、「みんな心を清浄に山の神、水の神に願立て、雨乞い祈願するんだ」と提案したので全員が賛同し、雨乞い祈願をした。神助を戴き、その夜半には大雨が降り、川は渦巻き荒れ流れ、全員でナーミチカーラ(長水川)の強い流れに材木を流し、山ジラバを歌いながら下りてきた。その時、向いの峯から、現場の監督役である築佐事(つきたけ)の声が掛かった。「豊見親が死んだ！ 材出しは中止、全員一応村に引揚げ。」このとき築佐事が声を掛けた峰を、クイシチ(声峰)という。これを聞いた全員は、川から丘に登り、「あの豊見親でも、死ぬことがあるんだねえ」と全身雨に濡れながら、頭を振っては珍しがり、喜びあった。それ以来、この丘をザブラフビリ(頭振り丘)と呼ぶようになった。木を引き上げた時に声をそらえて古謡のアユ(アヨウ)を歌った谷間をアユバン(あよはか)と呼んでいる。この一帯の地名をトゥイマヤパラ(豊見親柱)といい、アミクイユドゥ(雨乞淀)の名前とともに、5世紀を隔てた昔を物語っている。

古文書と対応させると、星勲さんの伝承するガイヤドゥバンが「あよはか」であったとも考えられるので、図では、ガイヤドゥバンを示さず、アユバンとして表示した。

仲良川・浦内川に共通する禁忌

『慶来慶田城由来記』からの引用を続ける。

一、むかしは二月七日に山留めと称して、早作りの稲や作物のため、神を敬うため七日から、仲良・浦田原で木鍬、鉄鍬を高く持ち上げて田を打たず、この両所に夜とまることもしないという。かたらあたんなてすのたをらた高田原の五か所にとまって田の仕事をする。

これは、仲良川と浦内川の水田地帯の双方に同じ禁忌があったことを示すものである。下段の5カ所の地名については、校注者も読解に困ったものと思われ、読点を打っていない。しかし、原文の

「其両所二夜とまり不仕よしかたらあたんなてすのたをらた高田原ノ五ヶ所に」

のうちで、「不仕よし」で切ったのは、実は誤りだった。ここは、「不仕」で言い切って、その後「よしかたら」「あたんなて」「すのんた」「をらた」「高田原」の5つの地名が並んでいるのである。これらの地名は、これまで述べたところから明かなように、現在の方言でいうなら、順に、ユシカガラ、アダナデ、シムンダ、ウラダ、タカタリにあたる。したがって、地名の前の部分の訳も「この両所に夜とまることもしない。」と言い切るのが正しい。川の禁忌は伝聞ではなく、生活実感の中に生きたものだったのである。

これらの地名は、いずれも仲良川の河口部近くの水田地帯であった。西表の島びとにとっては、アダナデ川、ウラダあたりまでが、人間の力のおよぶ範囲であり、そこから奥は神々の世界だと意識されていたことがわかる資料である。それは、ちょうど、浦内川が河口部のトゥドゥマリの浜を含めて全体が神々の住まいではあるが、特にイナバと呼ばれる上流部は、日を選ばずに立ち入れば恐ろしい神罰がくだる聖地だったこと(安溪・安溪、2003)と対応していると考えられる。

『慶来慶田城由来記』には、浦田(今日の浦内川)・仲良川に共通する禁忌として、以下のように書いている。旧暦の2月7日から5月までの間に仲良・浦田に行くときは、頭に手ぬぐいをかぶらず、火や飯も持って行かないこと。かぶり物は、神仏への不敬、田の畦を焼けば若い稲の生長を妨げる。食べ物、磯の匂いの強い角魚(テングハギ)・貝・なまこ・海亀などが稲のために良くない。煙草も厳禁と説かれている。そして、万一この時期に野火を出してしまった者は、浦内川のトゥドゥマリの浜の南西端の砂嘴イブヌサキで鞭によって15回叩いて罰を与え、1石の神酒(口噛み酒)を飲み干すまで、ここに留め置いてウナリ崎の神に詫びさせる云々。

この習慣を、今でもインドゥミ・ヤマドゥミ(海留・山留)の禁として、島の高齢者は記憶している。

西表島西部の名のある川の上流部は、仲良川も浦内川もいずれも人間の力を越えたカン(神々)の住まいたまたう場所であった。住民は、畏れと慎みをもって、そこに水田を作らせていただき、また狩猟や建材・舟材の採取の場所としても利用してきた(安溪・安溪、2000: 37-38)。こうした世界観に裏づけられた河川流域の資源利用の体系は、西表島の東部を始め石垣島などにもあったものと想定される。1) そのような世界観の存在を実

証的に明らかにすること、2)それが例えば戦前に広まっていた河川での青酸カリを使用した漁法の導入などの形で崩壊していく過程を明らかにすること、3)伝統的な世界観に学んで持続的な生活文化を島から提言していくという取り組みが、西表島の地名、ひいては人と自然の関係の研究に課された今後の課題である。

雨乞いの川

西表島は水の豊かな島である。新城島のような、飲み水にもこと欠くような低い島々では、はるかに見える西表島鹿川村の水田地帯の水が海に落ちる落水(ウティミ)の滝のように水を下さいと、雨乞いの願いをしたという。そんな西表島にも雨乞いの行事はあった。祖納村の天候を司る神司(アマチカ)を53年間も勤められた田盛雪さんのお話に耳を傾けてみよう(安溪・安溪、2004)。

私の代の53年間には、雨乞いは1回しか経験していません。神司になって6年ぐらいたった1960年ころです。私の祖母の姉妹が祖納のアマチカだったころの雨乞いの時には、仲良川のトゥイチャーパラ川の淀に沈んでいる大木を削ってきてニガイしたときいています。雨乞いの時には雨乞いの歌をうたいますけれど、普通は絶対に歌ってはいけません。大雨がふりますから。

トゥイチャーの命令で、仲良川の材木を切り出して縛るのに使うクチ(和名ツルモドキ)も採らされたそうですよ。西表島のクチは木にぐるぐる巻いています。ところが石垣島のは竹のようにまっすぐになっています。そのいわれは、トゥイチャーがクチを採るように言ってきたので山で準備していたら、トゥイチャーが死んだという知らせが来たんです。それを聞いて、喜んだ西表の人たちは、丸く輪にしていたクチを山に投げて捨ててきたから、それ以来西表島のクチは曲がって生えるといわれています。

このように、西表島では、祖先から受け継いできた歌の力や言葉の力が生きている。その力は、たくさんの地名の中に、さらに土地に根付いた岩や植物の中にも息づいているのである。

おわりに

仲良川流域の炭坑の分布（三木、1983など）や、製紙会社による大規模な伐採とリュウキュウマツ造林の失敗など、大正時代から現在にかけての変化を追うことが残ったが、紙数が尽きた。

西表島の山の中には、とくに川沿いにたくさんの地名が付けられている。これこそは、西表の島びとが島を隔々まで使ってきたことの証しである。さらに、およそ500年も昔から、西表島は周辺の島々への建材（木材および竹材）の供給源であり続けてきたこと、現在はみられないイスノキの巨木が西表島にあったと考えられること、などを確認しておきたい。つまり、我々が現在目にしている西表島の自然は、長期にわたる人間の働きかけの産物であり、間切などの政治区分や島々を結ぶ交易のネットワークの構造と機能（例えば安溪、1988）を明らかにしなければ、とうてい説明することができない性格のものなのである。そして、河川流域の研究を進めるにあたっては、島での水収支の解明ひとつとっても、50年に一度といった頻度でやってくる大旱魃の在地の記憶を探ること抜きにはほとんど意味をなさない。西表島の川沿いのボートツアーに参加する観光客が水田跡を見て「原始の自然だ」と歓声をあげるのは単なる無知だが、自然科学畑の研究者の多くが、西表島を自然が豊かな孤立した島だと見るのは、地域住民の生活文化の歩みを真剣に学ぼうという姿勢が欠けていたという反省にたつべきだと考えている。今後とも、島の方々とともに学びあいながら、島の自然と文化のかかわりの歴史についての総合的な研究を深めていきたいと願うものである。ご指導くださった西表島のみなさまに心から感謝もうしあげる。

（注） 例えば浦内川の場合、観光船を降りる軍艦石の所がエーラである。なお、「軍艦岩」と書いたガイドブックがあるが、正しくない。西表島西部ではどんなに大きな岩も「～イシ」なのである。軍艦とは、岩の形ではなく、タラップをかけて登ることが、当時の蒸気船（島びとはグンカンと呼んだ）のようだというので名付けられた、と

石垣金星さんは言う。また、「～岩」が西表島本来の地名ではないという知識があれば、サバ崎突端の「ゴリラ岩」という観光用の新地名が国土地理院の地図に入ることはなかったはずだ(安溪、1994)。

引用文献

- 安溪遊地、1979「西表島の稲作：自然・ヒト・イネ」『季刊人類学』9(3): 27-101
- 安溪遊地、1988「高い島と低い島の交流　大正期八重山の稲束と灰の物々交換」『民族学研究』53(1): 1-30
- 安溪遊地、1994「間違いだらけの西表島の地名」『情報ヤイマ』94年9月号: 2-3
- 安溪遊地、1998「西表島の焼畑　島びとの語りによる復元研究をめざして」『沖縄文化』33: 40-69
- 安溪遊地・安溪貴子、1986『わが故郷(シマ)アントゥリ　西表・網取村の民俗と古謡』ひるぎ社
- 安溪遊地・安溪貴子、2000『島からのことづて　琉球弧聞き書きの旅』葦書房
- 安溪遊地・安溪貴子、2003「ワニのいた川　西表島浦内川の昨日・今日・明日(上)」『季刊・生命の島』64: 54-61、屋久島産業文化研究所
- 安溪貴子・安溪遊地、2004「島を守って半世紀　西表島の神司・田盛雪さんのお話」『季刊・生命の島』68: 53-62、屋久島産業文化研究所
- 石垣市史編集室、1991「慶来慶田城由来記」『石垣市史叢書』1、石垣市
- 国際マングローブ生態系協会、2004『平成15年沿岸生態系と海面上昇モニタリングを目的とした沖縄県内のマングローブ分布状況調査業務報告書』特定非営利活動法人国際マングローブ生態系協会
- 鄭 光、2004「(朝鮮王朝実録)の昆虫とその象徴性　トンボとセミ、アリを中心に」上田哲行編『トンボと自然観』京都大学学術出版会
- 玻名城康雄(翻刻)、1980「八重山嶋旧記・資料」『八重山文化論集』2: 273-294、八重山文化研究会
- 玻名城康雄(翻刻)、1983「資料紹介・八重山嶋由来記」『石垣市立八重山博物館紀要』3: 52-88
- 星 勲、1980『西表島のむかし話』ひるぎ社
- 星 勲、1981『西表島の民俗』友古堂
- 前大用安、2002『西表方言集』著者発行

三木 健、1983『西表炭坑概史』ひるぎ社

筆者のウェブページ <http://ankei.jp>